

八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和3年10月） 回覧

2. ここは市川砂州の上（立派な改耕碑の背景）

「古くからの寺社の近くは災害が少ない地」は不動産購入の目安の一つ。千本公孫樹は1200年の樹齢をこの地で。ただし熊本地震で阿蘇神社（葛飾八幡宮より古い由緒）も倒壊したから油断は禁物。地球規模の変動ですと千年は短期間。

縄文海進と称されている時期（約6000年前頃に海進のピーク）には、海が北部の下総台地（台地の縁に貝塚遺跡が多い）まで入り込み、この地は海の中。

弥生時代（約2000年前）頃には海が後退。ここは湾の奥だから海砂が堆積しやすく、海岸線に平行な砂州（市川砂州）が形成される。

海水面より僅かに高い程度だが、川岸に土砂が堆積して出来た自然堤防と同様に地盤は比較的良好。ただし大地震では液状化の不安はある。

（海拔は神社4.1、全日警ホール3.7、不二女子3.9、市役所3.3、cf八幡小4.1、大和田小1.9）

海岸線の痕跡はJRと国道14号の間の東風庵（豆腐料理）～平田の道路で、14号側が高いことで理解できる。行徳の塩田が壊滅した大正6年の台風による大津波は当時のJRの築堤（鉄道土手）で止まる。今は高架だから少し不安。



（『図説 市川の歴史 第二版』の1章の図2「市川の地形分類図」より）

”白砂青松”と称されるように砂浜に松は日本の原風景の一つ。”市の木”も黒松。昔は総武線で下町を抜け市川鉄橋を渡ると北側の車窓に多くの松が見えてホッとしました。神社の昔を描いた鳥瞰図や古写真も参道は銀杏でなく松が生い茂っている。

砂地は保水力が無く、砂地に適した作物を求めた川上善六が木曾川流域の梨栽培をヒントに、東国で成功。八幡梨は江戸で大評判。この話は改めて。

下総台地は上図のように樹枝状に多くの谷津（ex 大町自然観察園＝長田谷津）が生じ、そこに流れた水は台地間の谷の国分川、大柏川に集まる。また江戸川から入り込んでいる「真間の入り江」があった。市川砂州は海自然堤防になると同時に後背台地からの水ハケを阻害するので台地と砂州の間は湿地帯。スゲが多かったから「菅野」か。一方、砂州上の「大芝原」（隣の自治会名で旧字名）は乾いた感じ。

「宮久保から八幡に来る時はぬかるんでいる所が多くあった」との古老談は多い。

この湿地帯の水ハケが良くなったのが改耕碑に記された工事。明治44年～大正9年にかけて、「真間の入り江」を須和田の台地を大幅に削り取って埋め立てて、真間川と境川（富貴島小から下流）が接続・整備され、原木から東京湾に排水。水田の水路も整然と区画され、米の反収も増加し、二毛作も可能になる。大工事を讃えてあのような立派な碑。一方で宅地化も容易になり、首都東京の発展と、関東大震災（大正12年）後の転入増も相俟って、今の大住宅街。